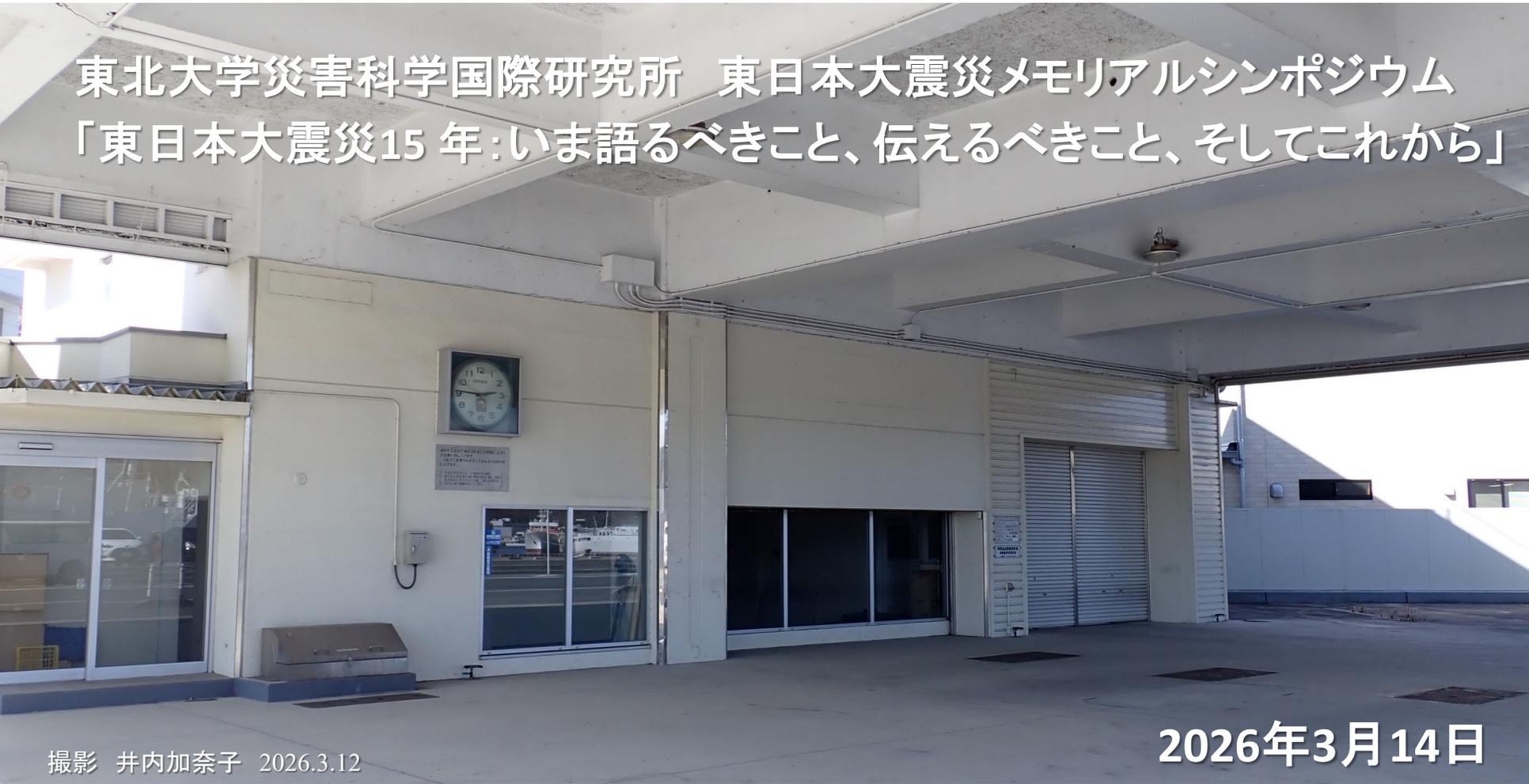


# 災害リスクを踏まえた復興政策に対する 地域社会の長期的レスポンス

東北大学災害科学国際研究所 東日本大震災メモリアルシンポジウム  
「東日本大震災15年:いま語るべきこと、伝えるべきこと、そしてこれから」



撮影 井内加奈子 2026.3.12

2026年3月14日

井内加奈子(東北大学・災害科学国際研究所)

# 15年を振り返るにあたって

## キーワード

- **未曾有**の震災:「想定外」規模の復興
  - 復興方針の策定や復興法制化に約1年
- **ハザード回避**: 将来の津波リスクの低減
- **「積極的な復興」**(五百旗頭2016):  
インフラ整備、経済的発展、社会的支援
  - BBB=強靱化
  - 技術革新=経済社会の再建  
(復興構想7原則3)
  - 復興=日本経済の再生(復興構想7原則5)
- **創造的復興**: 被災地の広域性・多様性
  - 地域・コミュニティ主体の復興  
(復興構想7原則2)
- **オールジャパン**:  
ゆとりのある予算、自治体派遣、民間連携、等の全国展開



# 復興構想の内容

「(津波)リスクの低減」と  
「社会的支援の充実」により  
日本経済を再活性化する

- **減災**に向けた対策として
  - 防潮堤建設
  - 「危険区域指定」
  - かさ上げ、集団移転事業、等
- **人口減少と高齢化**対策として
  - 技術革新による地域の経済的再建
  - NPOや中間支援員などの社会的支援とコミュニティの形成



# 成功事例として注目された事例

## よい地域再建の事例① 住民を中心とした対話を通じて生活様式を保全・再建した地域

### 抵抗による対話の事例

i.e., 大谷海岸

当初の防潮堤設置案への反対→

設計デザインの変更・建設



### 調整による対話の事例

i.e., 花露辺

自治体派遣職員を介した調整→

自然地形を有効活用した減災対策→

地域の生活様式を保全





# 語られていない「静かな抵抗」 からうまれた動き

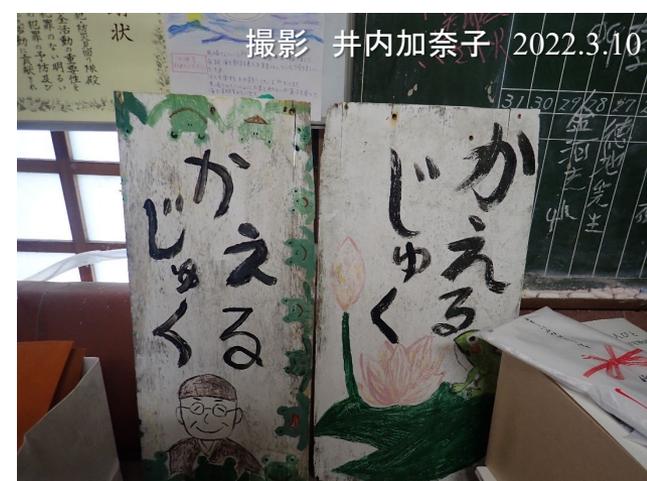
## 唐桑半島「カエル塾」

- 「カエル」塾
  - 唐桑を訪れたボランティアが「かえって」来る場所
- 津波から残った納屋が地域内外をつなぐ交流の場に
  - ① 震災当時に学生ボランティアに解放
  - ② 震災経験を語る学習の場
  - ③ 移住者らの集いの場
- 土地(自宅)は危険区域指定される
  - 行政の買取対象地であったが売却せず
  - 危険区域としたりたくない
  - 公営住宅に入るなら大きな資金不要



撮影 井内加奈子 2022.3.10

- すまいの変遷
  - 仮設住宅→高台の公営住宅
- 実態
  - 震災後3年程度は仮設で入浴などを済ませ、「カエル」で寝泊まり
  - その後も、日中はほぼ「カエル」滞在



仮設にひとりしていると、将来どうなるんだろうという悲観的なことしか考えない。カエル塾にひとりしていると、直さないといけないのかな、ここに住むのかな、どこかに行くのかな、という違いがある。仮設のドアをまたいだ途端に気持ちががらりと変わる。カエル塾に帰ってきて、本宅の跡に車を停めるとがらりと変わる。こころのぬくもりが、仮設にいる時をゼロとすると、カエルにしていると20から30くらいある。

宮本 2015 災害復興における“めざす”かかわりと“すごす”かかわりより抜粋

あの日 あの時は被災体験したことは口には出したくないという思いが強かった

...

それなのに何故に旅人達にあのときのことを話続けてきたか

それは自らのさみしさを埋めるために語りかけてきたのかと...

口から語ることによって 自らが安心できるからかという思いだったのかも

馬場国昭氏 「3年半の思いに馳せて」 から抜粋

- 震災から13年目
  - 「この10年は人生で最も充実した時間だった」

## 私設展示室(蔵)

- 津波により本宅は被災し、解体
  - 蔵は残す
- 土地(自宅)は危険区域指定・行政の買取対象地
  - 代々続く家なので土地の売却を避けた
  - 「防災集団移転事業スキームに乗らずに自分達(夫婦)でなんとか生きていきたいと思った(ただし、後に支援が絶たれた時には第2回目の被災だと思った)。」
- 蔵で展示を始めた理由
  - 「津波で汚れて散乱していた『家のもの』を洗ってきれいにしていくうちに、自分を取りもどしていった」
  - 「自己満足で整理・展示を始めた」



- 実は少なくはなかった「静かな抵抗」
  - 「蔵」のある地域内の移転対象世帯のうち34%が事業不活用
  - 居場所のない方々の居場所に
    - 移転事業に参加しなかった住民
    - 小・中・高の旧友
  - 生活再建のための話し合い・会話

- 「静かな抵抗」から生まれたつながり・動き
  - 経済的価値は生み出さない
  - 「多様な主体(NPO、民間、企業、行政)」などの肩書きを持たないものの集いの場
  - 個々人の立ち上がる力に



# これから

2026年：現在

- 未曾有の規模での人口減少が開始
  - 人の気配が薄れ、構造物の存在感が向上
  - 空地・売地の増加
- 経済縮小・人口減少
  - 当時は考えたくなかったが、現在は現実
  - 対応の方針は前例がない
  - 試行錯誤で進む



# 事例から分かったこと

- 目立つ・目立たない事例とも、「抵抗」や「対話」が新たな展開を迎えた
- 解がない時代に進む = 既定路線から脱却する
- 考え、対話を重ね、社会の変化に対応していく力をつけるのが重要では



撮影 井内加奈子 2023.6.10

**ご静聴ありがとうございました**